# 聖書宣教会通信

No. 189

**Japan Bible Seminary Newsletter** 



# 塚田 直樹

Naoki Tsukada 聖書宣教会 評議員 (福音伝道教団前橋キリスト教会牧師)

#### Profile

1970 年 群馬県生まれ。聖書神学舎 38 期卒業。現在、福音伝道教団前橋キ リスト教会牧師。聖書宣教会では、 2015 年より評議員。



# 「神の備えてくださる力によって」

「奉仕するのであれば、神が備えてくださる力に よって、ふさわしく奉仕しなさい。」

ペテロの手紙第一 4章 11節抜粋

聖書宣教会を卒業して教会に遣わされてから、早いもので、昨年で25年が過ぎました。教会に仕え奉仕していく者として、いつも思い起こされるみことばが、聖書神学舎の1年生の時に示された冒頭のみことばです。

入会した頃の私は何もかもが新鮮で、何でも チャレンジしていこうと前向きでした。しかし、い つも全力疾走気味の私は程なく、自分の未熟さや 不足を感じるようになり、献身者としてふさわしく ないと感じるようになり、1年生の後期の頃には いささか気力さえ失いかけていました。

そのような時、1995年1月17日、阪神淡路大震災が起こりました。聖書宣教会は授業日程を調整して、神戸へ被災地支援のボランティアを派遣することになり、私も約一週間奉仕させていただきました。その奉仕先の一つで、日本基督教団兵庫松本通教会がほぼ全壊してしまったとするの、日本基督教の、五の、五の時、教会の備品などの回収作業の方々が作業しながら、「失われたことはつらいが、早く瓦礫を撤去して、ここにボランティアセンターを建てて、地域の方々の支援を始めていきたい」と言っておられたことが大変印象深く私の心に残りました。喪失感で一杯かと想像しましたが、すでに地域教会として何をすべきかを考えていることに驚きました。自らの不足を感じながら気力

を失いかけていた当時の私にとって、被災されても主にあって進もうとしておられる姿に、ボランティアとして来た私の方が新たな力づけを頂く機会となりました。

震災から20年が過ぎた頃、2016年に神戸で日本伝道会議が行われた時、再び、私は兵庫松本通教会を訪問させていただきました。招き入れてくださった教会の一室には、被災時の写真や復旧後、復興に向けて教会が行ってきた地域支援活動の記録が大切に保管されていました。写真などを見せながら丁寧に説明してくださいました。新しい会堂が再建され、被災された当時の牧師先生から新たな牧師先生と教会員の方々に働きが受け継がれている有り様を拝見しました。地域教会が復興と支援活動の拠点として大きく用いられてきたことに感動いたしました。

今、改めて思います。たとえずべてを失ってしまうことがあっても、自分の力ではなく、神様が新たに備えてくださる力が必ずあること。その力によってなす、主の喜ばれる奉仕があることを覚え、これからも主の教会に仕え、さらに次世代に続く働きができるようにと願っています。

#### No.189 Topics

- p03 学びの窓
- p04 夏期研修講座
- p05 教会音楽夏期講習会
- p06-07 キャランバン報告

# **01** 聖書神学舎から Seminary News

# 立ち上がり、語れ

**赤坂 泉** Izumi Akasaka 聖書宣教会 校長

さあ、あなたは腰に帯を締めて立ち上がり、 わたしがあなたに命じるすべてのことを語れ。 彼らの顔におびえるな。

(エレミヤ 1:17a)

#### 夏には夏の

神学校の夏は、普段とは違った時間が流れます。チャイムが鳴るのは7月1日まで。その後は夏ならではのペースでことが動きます。

夏期研修講座は三年ぶりに対面で開催できました。定員を制限し、様々な対策をとりながらも、ひたすらローマ書に聴く幸いな講座となりました。一方、教会音楽夏期講習会は感染の急拡大に鑑みて、中止を決めました。申込者にはご迷惑をかけましたが、止むを得ないと判断しました。

キャラバン伝道では、三つの教会ともに工夫しながら予定通りにチームを受け入れてくださいました。福音を携えて出かけ、福音を語る伝道実習の貴重な経験、主のみわざを目撃する大切な経験をさせていただけました。詳しくは、6,7 頁の報告をご覧ください。

普段とは違う人の動きもあります。不意に学舎を訪ねてくださる方々、献品を届けてくださる方々、修理や庭の整美のためにわざわざお出かけくださって見えないところで奉仕してくださる方々。大勢の皆様の祈りと主への奉仕に支えられている、まさしく教会のわざとしての学舎であることを痛感する日々です。主に感謝し、主の教会の皆様に感謝しています。

# 秋には秋の

8月末の帰寮日には、それぞれの夏の収穫を 携えて研修生一同が揃います。主の恵みのお取 り扱いのほか、一年生には学び始めたギリシア語 を夏の間にどう磨いたか、四年生には卒論の学びがどのように進んだか、と尋ねたいことはたくさんあります。楽しみです。

大掃除をして、毎日のチャイムが再開するのは9月2日で、10月14日の前期末まで走り抜けます。みことばを語るための訓練が祝されるようにお祈りください。

秋の企画や行事のためにもお祈りください。

9月2日に聖書塾「旧約に見るキリスト」が始まります。お茶の水クリスチャンセンターの会場で、小山田格先生が担当してくださいます。

10月15日には、オルガン協力会主催の演奏会が予定されています。

聴講制度にはコロナ対応で様々な制約を設定してきましたが、今秋の後期からはそれらの制限を無くして、以前のように聴講していただくことができます。

11月のオープン・デイと賛美礼拝には、皆様を学舎にお迎えしたいと思って準備を進めます。 内容は8頁でご確認ください。

#### 立ち上がれ

伝道者の高齢化と絶対数の不足は、日本の教 界が直面している重大な問題です。

主の器たちが召しに応答して立ち上がることを 祈っています。諸教会においてもいよいよ熱心に このために祈りましょう。献身者を励ましましょ う。福音を携えてこの時代に遣わされて行く伝 道者のために祈りましょう。

学舎の教職員の必要も、緊急性と切迫の度を 増しています。主の御旨が示され、実現するよう にお祈りください。

諸教会、皆様の上に恵みが豊かにありますように。

File No.021

# 「詩篇の配列研究

伊藤 暢人 Nobuhito Ito 聖書神学舎 教師

詩篇を 1 篇ずつ個々に読むだけでなく 150 篇全体がいかに構成されているか、その配列にも意図があるのではないかと考える、いわゆる「配列研究」は、近年盛んになっている詩篇の研究分野である。 NIVAC の G. ウィルソン、 NICOT のデクレセ・ウォルフォードといった、なじみの深い注解書シリーズの著者もこの見方に立っていることを考えれば、無視することのできない研究になっていると言える。

では、配列研究とはどのようなものか。研究者の神学的な立場や前提によって、配列の意図を考える程度や方向性は著しく異なる。紙幅の限界があるが、上記ウィルソンの研究をごく簡単に取り上げる。

ウィルソンは、詩篇の第1巻から第3巻(1~89篇)と第4巻から第5巻((90~150篇)では全く異なった編集技法が用いられていることを強調し、後者は前者よりも後代に成立し、あとから詩篇に組み入れられたとする。

また、序論の1篇と結末部である146-150篇は一旦脇に置いて考えて、2-145篇を上記の大きな2つの区分に分ける(2-89篇と90-144篇)。そこから、表題や内容に注目することによっていくつもの小さなまとまりに区分し、それらの複雑な組み合わせや成立過程を探りながらも、全体としては2つの大きな編集上の枠組みがあるとする。すなわち2-89篇まではダビデ王朝の契約を枠組みとし、契約の始まり(2篇)、継承(72篇)、失敗(89篇)という内容を持つ。89篇でダビデ王朝は終焉を迎え契約は失敗したが、それに代わって90-144篇では主ご自身が王となるという神の王権が信仰共同体を支えることになる。

もう1つの枠組みは知恵の詩篇である。知恵の詩篇も巻ごとの節目に計画的に配置され(73篇、90-91篇、106篇)、さらに冒頭と結尾にも配置されることで(1篇と145篇)、重要な機能を持つようになった。すなわち、冒頭に1篇が配置されることで、詩篇全体が神殿礼拝における共同体の朗唱用テキストという位置づけから個人的な祈りと瞑想の書へとシフトし、また、最末尾の145篇21節で表明された賛美が、現存の詩篇全体の本当の頂点をなしていることになる。

このように、詩篇を読むときに前後の隣接する詩篇との繋がりを考えることは新鮮な視点であり、気づかされることも多い。しかし、たとえばウィルソンの研究の背後には B. S. チャイルズの正典的アプローチがあり、それが従来の編集史や伝承史を否定したものではないことは注意を要するだろう。ウィルソンの研究もグンケルの類型研究を受け入れているだけでなく、正典的アプローチを詩篇に適用・実践したものに思われる。そういう意味では、本文への向き合い方は伝統的な詩篇理解とは異なることに気づいておかなければならない。

また、何より、編集ということを前提に詩篇の配列や神学的意図を探ろうとすると、どうしても個々の詩篇の個性が失われ、一般的な特徴やテーマでとらえることになる。しかし、むしろ出発点は個々の詩篇であり、そこを丁寧に釈義していくことによって初めて、隣接する詩篇との繋がりや相違が見えてくるのではないだろうか。

# 夏期研修講座の報告

三浦 譲 Yuzuru Miura 聖書神学舎 教師

コロナ禍のために対面では開催できなかった 夏期研修講座でしたが、三年ぶりに奥多摩に集 まっての講座でした。総計 44 名と例年に比べ ると少ない人数でしたが、その分、皆さんと親し く、楽しくお交わりさせていただきました。

今年は鞭木由行先生を主講師に、「ローマ書に聴く」と題して6回の講義(講義1のみ三浦が担当)が行われました。今回は、開会礼拝・閉会礼拝、二回の朝の祈祷会も、すべてローマ書からのメッセージ。ローマ書漬けの三日間でした。

NPP (New Perspectives on Paul)「パウロ神学の新しい見解」の影響もあって、ローマ書の読み方が揺れている中、講座ではこれまでの宗教改革以来のローマ書の伝統的な読み方を確認しながら、鞭木先生が主にローマ書4章から8章を扱ってくださいました。鞭木先生はすでに「パウロの福音を生きる」というローマ書5章~8章4節の講解本を出版なさっていますが、今回の講座はその背後にある旧約・新約の釈義に基づいた深い講義でした。

神学舎において論文で取り組まれて以来、鞭木先生にとってローマ書における「罪の問題」は 先生の生涯におけるテーマの一つであったと言 われます。今、ローマ書がどちらかと言えば教会 論的に読まれる傾向がありますが、教会論を排 除しないとしても、まずは人間の罪、そして信仰に よる義認という「福音」を扱ったローマ書です。 救済論的な書であることを再確認した次第です。

> **Q** 夏期研修講座 Summer Study Lectures



# 夏期研修講座に参加して

前原 将太 Shota Maehara 広福音キリスト教会牧師

奥多摩の自然の中で、聖書神学舎の教師の方々から貴重な学びの機会を頂いたことを心から感謝致します。 研修全体において、初めから終わりまで「ローマ書」に焦点が当てられていたため、みことばの恵みをより深く味わうことができました。

鞭木由行師の講義は、原語を通して、聖書テキストに近づくことをゆるされていることの素晴らしさを改めて実感させてくださいました。私は主に2つの点がとても印象に残りました。

まず信仰義認について。近年、N.T. ライト等の影響によって、信仰義認を共同体論として理解していこうとする傾向があります。しかし創世記15章6節のアブラハムの信仰義認の釈義的考察を加味しつつ、パウロの信仰義認は、宗教改革者等が理解したように救済論として位置づけられるべきことが示されました。

次にイエスの人間性について。8章3節で、「形」(ホモイオーマ)の語彙研究を含む釈義を通して、主イエスは堕落性のない人間性ではなく、堕落性のある人間性をとられ、それにもかかわらず神としてのご性質ゆえに、罪なき生涯を全うされたということを教えられました。これにより主イエスの贖罪が徹底的なものであったことを知りました。

この時代で罪に苦しむ魂に対して、真の福音を 説教させて頂くために学び続けたいと思います。

# **04** 教会音楽夏期講習会 Church Music Summer School

赤坂 恵美

Emi Akasaka 教会音楽夏期講習会担当

2年続きのオンライン講習会を経て、今年度こそはと、対面ならではの内容で企画した教会音楽夏期講習会でしたが、残念ながら直前に開催中止の決断をしました。

コロナ対策のために制限した定員は早々に満ち、お断りをせざるを得なかった方々もおられました。コロナの感染状況は怪しくなり始めていましたが、よもや中止はあるまいと、皆さんの熱意と期待を感じながら身の引き締まる思いで準備を進めていました。運営準備も着々と整えられていましたが、かつてないほどの感染拡大予測を前に、誰一人不安に思うことなく講習会を開く状況にはないと判断しました。主の御思いに耳を傾けつつ、万全の準備をもって次回に臨みたいと願っています。直前の中止決定にも、愛をもって受け止めてくださった皆様には、深くお詫びと感謝の気持ちを申し上げます。

# 「朗読とコラールによるヨハネ受難曲」について

**矢吹 綾子** Ayako Yabuki 聖書神学舎 教師

バッハのヨハネ受難曲は、ヨハネの福音書 18 章から 19 章に記されているイエス様の受難の出 来事を、聖書のことばをそのまま用いて作曲されて います。福音史家という語り手と、イエス様、ペテ ロ、ピラトらの登場人物がソロで朗唱し、群衆を合 唱が歌い、その他、自由詩による合唱やアリア、朗 唱や合唱により歌われた聖書のことばを受けて信 仰を告白するような役割をもつコラールからなる オラトリオ風受難曲という形をとっています。この 作品は、ライプツィヒのトーマス教会のカントール に着任したバッハが、1724年に作曲して初演し、 その後何度か改訂して再演されてきており、叫び、 悲嘆、苦しみ、十字架、希望など、文字だけでは表 現できないことを、音型や和声や調性の特徴を用 いて、受難の出来事が心により深く刻まれるように 作曲されています。

コロナ禍になる前、私は毎年、受難日や受難日前に、オーケストラはオルガンで代用し、朗唱は聖書朗読としたコラールと数曲の合唱とアリアによるヨハネ受難曲演奏会で、オルガンの伴奏をして

いました。練習を重ねた各教会の配役の方々が 熱い思いを持って行う聖書朗読に感動し、歌われ る合唱やアリアやコラールの歌詞を通し、イエス様 の十字架の贖いによって罪赦されたことを深く覚 える、恵みの時となっていました。

今年の教会音楽夏期講習会では、ヨハネ受難曲のテキストであるヨハネの福音書 18 章から 19 章のみことばを学び、さらに、歌詞の内容を音でどのように表現しているか、また、バッハがヨハネ受難曲で用いたコラールついて学んだ後に、聖書朗読とコラールによるヨハネ受難曲を演奏することを通し、主の救いの御業に心を向けてもらいたいと願い、テーマを決めました。

対面で行うことによって、その目的が達成される 内容であったため、再び新型コロナの感染が拡大 し始めた今夏の講習会は、中止せざるを得なくな りました。参加を予定していた方々には申し訳な く思いますが、来年、また同じ内容で、対面で行え ることを祈りつつ待ち望んでいます。





# ● 福音伝道教団 大胡キリスト教会(群馬県)

#### 7月10日(日)-18日(月) 竹内基喜、阿部祐、狩野和信

大胡キリスト教会がキャラバン実習先の教会として申し出てくださり、主任牧師である松野牧人先生と2月から連絡を取り始めました。

4月に入り、松野先生が尾島キリスト教会との兼牧を始めるという連絡を頂きました。大変忙しくなっていく中でのキャラバン 実習が牧会の邪魔になるのではないかという恐れも持ちました。 ですが、お忙しい中でも松野先生はこまめに私達に連絡をくださり、共に実習へ向けて祈り備えていくことができました。

私達が担った奉仕は主に赤城南面伝道(大胡・宮城・粕川などの地域)としてのチラシ配布、また、夕方から教会に集う青年たちとの交流、その青年たちへの伝道集会などでした。

地域への伝道の困難さを覚えつつ、その困難さの中でも教会が 伝道し、集う未信者(青年~年配の方)の方々にも救いがもたらさ れるよう祈っていきたいと思います。多くの祈りに支えられ、積極 的な伝道について深く学ばせて頂いた実習となりました。

# 2 日本福音キリスト教会連合 昭和町キリスト教会(山梨県)

#### 7月20日(水)-7月28日(木) 寺村幸雄、昼田理江、川口美琴、中村瑞来

「教会の皆さんがみことばに聞くことを大切にしておられ、経験豊富で、とても成熟した群れだな」というのが、昭和町キリスト教会の第一印象でした。それもそのはず、27年前、宣教師や牧師に任せるのでなく、信徒を中心として開拓されたというルーツが、教会の根底にあるからです。

聖書の学びに始まり、祈祷会、チラシ配布、子ども特別集会、家庭訪問、教会学校、主日礼拝など多様な奉仕に関わらせていただく中で、キリスト者が成長するための糧としてのみことばの役割を改めて教えられました。また、教会の皆さんとの交わりを通して、主にあって一つとされている共同体の真髄を存分に味わう経験もさせていただきました。

みことばの説き明かしを負託された者として、いつも神様を恐れる心を失わず、基準にすべきは神様のみであることを忘れないでいたい、そして、そのためにも丁寧にみことばに向き合っていく姿勢を大切にしていきたいと学ばされました。







# 

### 7月25日(月)-30日(日) 田中甲子郎、橘川弘毅、林哉希

関宿チームは礼拝奉仕、学習塾、キャンプ、家庭集会、子ども会などの奉仕をさせていただきました。 祈り支えてくださった皆さま、関宿チャペルの皆さまに感謝いたします。

関宿チャペルは、人口の少ない農村地域で長年じっくりと腰を据えた働きをし、また塾を通しても地域に貢献してきました。 今年は、その塾から3名の小学生がキャンプに参加しました。 初参加のある女の子はキャンプ後、「誕生日プレゼントは聖書がいい」とお母さんにおねだりしたそうです。

同じく塾の小中学生を誘った子ども会にも、多くの子どもたちが 参加しました。子ども会はコロナ禍のため休止中でしたが、再開 のきっかけの一つになったとのことです。

今回のキャラバンでは、主が一人ひとりを愛しておられること、また信仰とビジョンを与え、教会を通して働かれていることを見ることができました。そして、教会員一人ひとりの宣教に対する熱心が広がり、実を結んでいることを見ることができました。この尊い機会を与えてくださった主に感謝いたします。







05 キャラバン伝道報告 Caravan Reports

コロナ禍、特に第7波が急速に拡大していた時期にも関わらず、信仰によって、私たち3チームを受け入れてくださった教会の皆さんに感謝申し上げます。 私たちが仕えさせていただく側として伺ったはずが、逆に皆さんが私たちを温かく迎えてくださった姿を通して、教会に仕えていく実践的な学びを経験させていただけました。

寺村 幸雄

Sachio Teramura 2022年度 キャラバン実行委員長

# ○ 図書館だより

# 鞭木 由行

Yoshiyuki Muchiki 聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

振り返って見ると、これまで実に多くの図書館のお世話になってきました。在籍した神学校や諸大学の図書館はもちろんのこと、そこでは入手困難な場合には、さらに上級の(?)図書館を利用する特権を与えられてきました。新しい図書館との出会いは、それ自体大きな喜びであり、また貴重な文献にアクセスすることで研究の大きな助けとなります。本格的な図書館との最初の出会いは前回も触れたゴードン・コンウェル神学校の図書館でした。小高い丘の上に煉瓦造りの神学校の建物が点在し、その頂上に図書館があり、その丘を登り図書館にはいることは日々の楽しみでもありました。以前は関連する論文を探り当てても、その論文を実際に入手することは、ほとんどできませんでしたが、ここでは地下の倉庫に無数の学術雑誌が所狭しと並べられており多くの論文を閲覧したり、コピーしたりすることができたのです。研究のため図書館の便利さ、必要性をつくづく味わった経験でもありました。そのような図書館の存在を羨ましいと思いつつ、日本の神学校の図書館ではとても追いつけない現実を痛感させられました。

ただ、これはあくまで紙ベースの図書館の話です。誰もが感じているように、現在情報の記録と伝達は、紙ベースから電子ベースへと急速に置き換わっています。このことが図書館にも大きな影響を与えていることは誰もが気が付いていることでしょう。そこには追いつくことができる大きなチャンスが到来しているのではないかと期待させられます。しかし、そのためには予算と専門家の助けが欠かせず、リサーチライブラリーとして今後の大きな課題です。(続)

# 聖書宣教会からのお知らせ Information

# 「オープンデイ」のお知らせ11月5日(土)

オープン・デイは、皆様を授業見学や礼拝出席にお迎えする学舎公開の日です。今年は羽村の学舎にお出かけくださることを歓迎いたします。事前申込は不要です。一部の授業とチャペルはオンラインでも公開予定です。時期が近づいたら聖書宣教会のWEBサイトでご案内します。

(駐車スペースが足りませんので、直接車でのご来会はご遠慮ください。)

	I限 8:20-9:05	II限 9:15-10:00	10:10- 10:40	III限 10:50-11:35	IV限 11:45-12:30
1 年	教会史	(若井 和生)		旧約各書 I (伊藤暢人)	
2 年	新約釈義Ⅱ	(横山 昌英)	チャペル	旧約研究   (五書) (田村 将)	教会音楽実習 A/B
3 年	旧約釈義Ⅲ	(鞭木 由行)	説教者 (田村 将)	牧会学IV (牧会の神学) (赤坂 泉)	(矢吹 綾子)
4 年	旧約釈義IV	(鞭木 由行)		牧会学V (牧会の諸問題) (鞭木 由行)	
	オンライン公開予定 (時間割は当日変更となる場合もあります)				

○「賛美礼拝」のお知らせ11月26日(土) 14:30-

「新しく生まれなければ」

聖書:ヨハネの福音書 3章1-15節

説教:三浦 譲

(聖書神学舎教師、横浜山手キリスト教会 牧師)

(駐車スペースが足りませんので、直接車でのご来会はご遠慮ください。)

賛美礼拝は、賛美のうたをもって主をほめたたえ、主のみことばを聞き、主を礼拝するときです。皆様が来会してくださって、共に礼拝に参加してくださることを歓迎いたします。事前の申込は不要です。オンラインの配信も予定しています。時期が近づいたら聖書宣教会のWEBサイトでご案内します。